1

次の文章は、四百メートルリレー走の都大会に出場している高校三年生の「朝月渡（あさつきわたり）」が、チームメイトの「脊尾（せお）」と翌日の決勝戦に向けて会話している場面です。第四走者の「朝月」は、準決勝戦で第三走者の「脊尾」が練習していないバトンの渡し方をしたことについて注意しましたが、「脊尾」がそれに反論しました。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

「練習でやってないことをやるなって言ったけど、オレはそれ、逆だと思う。ⓐ試合でやらないことを、おまえが練習してたんだよ」

俺は数秒ぼんやりしてから、目を白黒させた。

「は？」

なに言ってんだ、こいつ。

「バトン、全力で〝もらう〟つもりだったって言うんだろ？　加速できなくてもいいから、とにかくもらうことに全力を尽くすつもりだった、って」

脊尾は、言い返そうとした俺の機先を制する。

「けど、おまえの背中はちゃんと走ろうとしてた。オレがいけって言う前に、攻め気に走り出してた。その後ブレーキ踏みそうだったからⓑ叫んじまったけど」

俺がぐっと言葉に詰まったのは、それが事実だと自覚しているからだ。空斗（たかと）さんなら……と考えた瞬間、足が勝手に動き出していた。

「逆に訊（き）くけど、なんでブレーキ踏もうとしたんだよ」

俺は脊尾を睨（にら）みつける。

わかるだろ？　おまえも三年なら。

「だって嫌だろ！　これが最後の年なんだぞ！　最後のチャンスなんだ。バトンミス一つで終わるなんて……」

口にすると、それは思っていた以上に格好の悪い理屈だった。だけど本音だ。きっと、日本中の高校三年生が、陸上に限らず、スポーツに限らず、感じている恐怖だ。今年で最後。一走、一跳、一泳、一球、一投、一打、一奏、一描、一書、その他すべての部活動におけるありとあらゆる動作に、きっとたくさんの三年生が魂を込めている。高校一年、高校二年のときには感じなかった。だけど高校三年は……最後だと思った瞬間、急に怖くなって必死に練習しだしたりして……俺はそれを否定しない。だって俺もそうだから。

「だったら詰まってでも、確実にもらう方が絶対いい」

俺は自分のつま先に向かって、吐き捨てるようにつぶやく。ⓒ脊尾の顔なんか見られない。

「そんなふうに守って、明日の決勝勝てると思うか？」

脊尾が静かに訊いた。

「勝てないかもな」

それは今日思った。

「でもタイムが届かなくて負けるより、バトンを落として負ける方が、俺は後悔する」
そうだろう？
そうだろう？
誰だって、そうだろう？
盛大なミスをして終わるより、それなりで終わりたいだろう？　終わりよければすべてよし、なんて言葉、終わった瞬間にはくそくらえって思うさ。けど終わるまでは、それに縋ったっていいだろう？　俺たちは、三年間を費やしてきた。決して短くない時間を捧げてきた。その終わりがⓓお粗末なバトンミスだなんて、一生悪夢に見る。冗談じゃない。
「なに言ってんの、おまえ」
ⓔ顔をつかまれて、上を向かされた、ような気がした。脊尾は依然はす向かいに座っている。少し身を乗り出して、俺をじっと睨んでいる。
「ふざけんな。どっちだって後悔するに決まってんだろ、そんな二択。なんでそもそもこの二択なんだ」
なんで、おまえが、怒ってんだよ。
「バトンも成功して、タイムも最高を出す。そうだろ？　それをやるべきだろ？　なんで最初からそれを目指さない？」
バトンパスの理想は、前走者が十のスピードのまま、十のスピードで走る次走者にバトンを渡すことだ。そんなの、わかってるさ。
「できねえんだよ！」
俺は喚いた。
「できるわけ、ねえだろそんなの。俺とおまえの間に、そんな信頼関係なんかねえよ」
そうだ。遅過ぎたんだ。俺とおまえは、わかり合うのがあまりに遅過ぎた。もっと早くに、お互いを知ることができていれば……バトンパスだって、きっと、もっと――。
「おまえさァ……弱音吐くタイミングじゃねえだろ。泣いても喚いても、決勝は明日なんだぜ。明日走らなきゃなんないんだ。今の全力で、今できることをやるしかないんだ。できねえ、ってなんだよ？　違うだろ、やりたくないんだろ！　失敗が怖いから！」
俺は言い返そうと口を開く。でも言い返す言葉は見つからなかった。だって、脊尾の言っていることは正しい。失敗が怖いと、俺は今さっき、言い返そうとしているまさにこの口で、脊尾に言っちまった。（中略）
「なにごちゃごちゃ考えてるのか知らないけどさ、そんな難しいこと訊いてないだろ」
脊尾ががしがしと頭をかきながら言った。
ⓕ「向いてるかどうかとか、できるかどうかとか、訊いてねえよ。おまえがどうしたいか訊いてんだよ」
俺がどうしたいか？

「どうしたいんだよ、朝月は」
脊尾にきちんと名前を呼ばれたのは、初めてだったかもしれない。
朝月渡がどうしたいのか。そんなことは、訊かれるまでもなく、ずっと同じだ。
「……勝ちたい」
本音。きちんと本音。できるかどうかじゃない。向いてるかどうかじゃない。シンプルに、俺が成し遂げたいこと。
「勝ちたい！」
このチームで、明日の決勝、勝ちたい。優勝は無理でも、負けたくない。関東、行きたい。
脊尾がゆっくりうなずいた。
「だったら、もっとオレを信頼しろ。できなくてもしろ。そんでもっと引っ張れ。ちゃんと渡すから」
見知ったはずの三走は、力強い目で俺を見ていた。ギラギラとした目。夏の太陽みたいな眼差(まなざ)しだ。最初からこんな目してたっけな？　こいつ……。

（出典　天沢夏月(あまさわなつき)「ヨンケイ!!」）

（注）機先を制する――相手より先に行動して、その計画・気勢をくじく。
空斗さん――関東大会まで出場した陸上部の先輩。朝月が憧れている。
はす向かい――斜め前。
引っ張れ――ここでは「しっかり助走してからバトンを受け取れ」という意味。

①　――の部分ⓑ、ⓓの漢字の読みを書きなさい。

②　「ⓐ試合でやらないことを、おまえが練習してたんだよ」とありますが、ここで「脊尾」が非難していることとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　朝月が準決勝戦で練習の成果を発揮できなかったこと。
イ　朝月が練習で確実にバトンを受け取ろうとしていたこと。
ウ　朝月が加速してバトンを受け取る練習をしていたこと。
エ　朝月が準決勝戦で自分が指示を出す前に走り出したこと。

③ (c)「脊尾の顔なんか見られない」とありますが、その理由について説明した次の文の［　　］に入れるのに適当なことばを、二十字以内で書きなさい。

自分が抱いている［　　］から生まれた格好の悪い理屈を口にしたことで、脊尾に対して気まずさを覚えたから。

④ (e)「顔をつかまれて、上を向かされた、ような気がした」とありますが、「朝月」がこのように感じた理由を説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　三年生なら誰もが抱えているはずの気持ちを、脊尾にあっさりと否定されたから。
イ　陸上をやっていれば理解できる自分の考えに対し、脊尾が冷たい反応をしたから。
ウ　今日の結果から勝敗を予想しただけなのに、脊尾に考えの甘さを指摘されたから。
エ　脊尾の意見に対して素直に賛同したところ、脊尾が思いがけず抗議してきたから。

⑤ (f)「向いてるか……訊いてんだよ」とありますが、このときの「脊尾」の心情について説明した次の文の［X］、［Y］に入れるのに適当なことばを、［X］は三十字以内で書き、［Y］は文章中から四字で抜き出して書きなさい。

［X］ことが原因で明日の決勝戦は負けてしまうかもしれないという弱音ではなく、準決勝戦で攻め気に走り出した朝月の姿から脊尾が感じた、［Y］という本音を朝月の口から聞かせてほしいと思っている。

⑥ この文章の表現の特徴について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　「目を白黒させた」という表現は、脊尾から的を射た発言をされたために動揺を隠しきれない朝月の様子を印象づけている。
イ　「そうだろう？」ということばを繰り返し使った表現は、脊尾を根気強く説得しようとしている朝月の熱意を表している。
ウ　「がしがしと頭をかきながら」という表現は、朝月に対して初めて本心をさらけ出した脊尾の照れくささを強調している。
エ　「最初からこんな目してたっけな？　こいつ……。」という表現は、脊尾に対する朝月の見方が変化したことを暗示している。

2

次の文章は、杜牧の漢詩「山行」とその通釈、及びそれについての串田久治と諸田龍美の対話です。これを読んで、①～④に答えなさい。

山行　　杜牧

遠上寒山石径斜　　遠く寒山に上れば石径斜めなり
白雲生処有人家　　白雲生ずる処　人家有り
停車坐愛楓林晩　　車を停めて坐ろに愛す　楓林の晩
霜葉紅於二月花　　霜葉は二月の花よりも紅なり

【通釈】

ひっそりと静かな晩秋の山をどこまでも登ってゆくと、石の多い小径が斜めに続いている。白雲が湧き出てくる所に、思いがけずも人家があった。車を停めて、私はいつしかうっとりと、紅葉した木々が夕陽に照り映える、その美しい風景に見とれていた。晩秋の霜にあって色づいた木々の葉は、あの春二月に競い咲く美しい花々よりもさらに紅く美しい。

【対話】

串田　確か宋玉でしたね、「秋は悲しい」と最初に詠ったのは？

諸田　ええ、彼が「悲しいかな、秋の気たるや」と宣言してから、秋は悲しい季節、というイメージが定着したといわれます。

串田　たとえば『詩経』には、悲しい秋というイメージはまず出てこない。秋は収穫の季節ですから、本来、よろこばしい季節だったはずで……。

諸田　そうなんですね、だから、日本でも『［A］』では「悲しい秋」というイメージはあまりなくて、それが定着してくるのは、平安朝の初期ですね。（中略）

串田　「山行」は「寒山」「石径」「白雲」と、モノトーンの世界ですね。

諸田　ええ。五行思想で四季を表せば「青春」「朱夏」「白秋」「玄冬」ですから、秋の色彩は白。モノトーンに近い「山行」の前半は、たいへん秋らしい風景だといえるかもしれません。

串田　それが後半でガラッと変わるんですね。「霜葉は二月の花よりも紅なり」とは、紅葉の鮮烈な色彩が目に焼き付くような、実に印象的な表現です。

諸田　そうですね。私はこの「山行」を読むと、いつも藤原定家の「見渡せば花ももみぢもなかりけり　浦の苫屋の秋の夕暮れ」を連想するんですよ。

串田　「花ももみぢもなかりけり……」ねえ……。

諸田　「花ももみじもない」といいながら、実はその言葉を出すことで、読者の脳裏には即座に「花」や「紅葉」がイメージされるんです。

串田　そうか、杜牧の「山行」も、［B］。

諸田　ええ。それを言葉として提示することで、実景以上に鮮やかな「詩的イメージ」を作り出すことに成功していると思います。

（出典　串田久治・諸田龍美「ゆっくり楽に生きる　漢詩の知恵」）

（注）
杜牧――中国、唐代の詩人。
宋玉――中国、戦国時代の詩人。
詩経――中国最古の詩集。
モノトーン――単一色の濃淡や明暗だけで表現すること。
五行思想――中国の古代思想。五つの元素が万物を構成し、支配するという考え方。この考えに基づくと四季には色があり、春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒となる。

①　「山行」の漢詩の形式は何といいますか。漢字四字で書きなさい。

②　［A］に入る、現存する日本最古の歌集の名前を書きなさい。

③　［B］に入ることばとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　「二月の花」は実際には見えていないんですからね
イ　「霜葉」はまだ紅葉なんてしていないんですからね
ウ　「二月の花」と「霜葉」の両方が寒い季節の花ですからね
エ　「二月の花」と「霜葉」は同じくらい赤いんですからね

④　「山行」を授業で学習した孝一さんは、【対話】を読んで次のような感想文を書きました。［X］、［Y］に入れるのに適当なことばを、それぞれ十字以内で書きなさい。

私は「山行」から秋の美しさを感じていましたが、【対話】を読んで、それが二つの特徴によるものだということに気付きました。一つ目は、［X］ことです。後半で、前半のモノトーンの世界に対して紅葉を詠むことにより、それぞれの美しさを際立たせています。二つ目は、ことばによって想像力をかき立て、鮮やかな詩的イメージを作り出していることです。【対話】で触れられた定家の和歌にも似た特徴が見られますが、この和歌は宋玉の詩によって定着した秋の［Y］に影響されているように思うので、純粋に秋の景色の美しさを詠んでいる「山行」の方が、より鮮やかに秋のイメージを描き出していると思います。この二つの特徴が、「山行」を魅力的な作品にしているのだと感じました。

3

次の文章は、原研哉の「日本のデザイン、その成り立ちと未来」の一部で、日本の文化とデザインの関係について述べた文章です。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

僕はデザインの仕事をしている。デザインにはいろいろなジャンルがあって、皆さんが今座っている椅子も、ⓐテーブルも、手に持っているシャープペンシルも、ノートも、この部屋の空間も、学校の建築も、すべてデザインされたものだ。ある目的をもって、計画的にものを創造していく人間の営みすべてをデザインと呼んでもいい。（中略）

日本の文化の背景には「空っぽ」がある。これについては、まず日本人と神様の関係から話を始めなければならない。

ⓑ古来、日本人は神様のことをどう考えてきたか。神様は風来坊のように世界をフラフラと飛び回っている。そんなふうに考えてきた。時には山の上をさまよっていたり、時には田んぼの脇にしゃがんでいたり、時には民家の納屋の近くにたたずんでいたり、時には海の中のタコ壺にひそんでいたり……。

つまり神様とは自然の力そのものだったのだ。自然がそこにあるようにありとあらゆるところに神様がいる。その恵みに生かされて自分たちは生きている。つまり昔から日本人は自然というものと重ね合わせて神の存在を感じていた。（中略）

神様はあっちへフラフラ、こっちへフラフラしていて所在が不確かなので、ⓒヤクソクをとって会いに行くことは難しい。でも神様の力にお願いしたい。

そこで昔の人は、こんなものをつくれば神様のほうからやってきてくれるかもしれない、と頭を働かせた。四本の柱に縄を結んで地面を囲い、空っぽの空間をつくったのだ。これを「代」という。

神様はそこらへんをフラフラと飛び回っているので、柱と縄で囲っただけの何もない空間をつくると、それを目ざとく見つけて降りてくるかもしれない。「入ってくるかもしれない」そのような可能性に対して、神様を深く敬う気持ちが湧き起こる。「神様＝自然」の力がそこに宿っていることを感じて、昔の日本人はこの空っぽの空間に手を合わせてⓓオガんだ。

「代」は神様を呼び込むための空っぽの空間で、これに屋根の付いたものが「屋代」＝「社」ということになる。神社の真ん中にある、神様を祀る場所だ。空っぽの中に、もしかしたら宿っているかもしれない神様。その可能性のシンボルとして、昔の日本人は「神社」というものをつくった。

神社に行くと正面に鳥居がある。これも間が空っぽになっている。つまり「ここから出入りするのですよ」という記号だ。この鳥居をいくつもくぐりながら、まん中の「社」にたどりつく。そしてそこで「空っぽ」を介して神様と交流する。

社の前には賽銭箱が置いてある。外からは中が空っぽに見える。思わずお金を入れてしまう。「空っぽ」はいろんなものを引き寄せる。空っぽの神社の中に自分の心や気持ち、つまり祈りを入れて、神様と交流した充実感を得て帰ってくる。

ⓔ神社というのは昔からそういう風にできている。（中略）

茶の湯では、茶室というシンプルな空間で主人と客が向かい合って茶を飲む。茶室には花や掛け軸など最小限のしつらいしかない。窓や軒に切り

取られた庭の控えめな景色。障子を通した柔らかな間接光。

ⓕ春を表すのに桜のイメージを取り入れたいとしよう。ヨーロッパのオペラハウスなら、疑似的に桜の木を造形するなどして、リアルで臨場感のある見せ方をするだろう。ところが日本の茶室では、たとえば、水を張った水盤（花や盆栽などを生ける底の浅い平らな陶器）に桜の花びらを数枚散らすだけで、あたかも満開の桜の下にたたずんでいるように見立てる。最小限のしつらいで最大のイメージを共有するのだ。

簡素だからこそ想像力が大きくはばたく。ごくわずかなしつらいに大いなる豊かさを呼び込む。これが「わび」の精神だ。西洋生まれのモダニズムが良しとした合理的な「シンプル」の価値観と似ているようで、全く違う。

そこにはやはり、先ほどから述べてきたような、神を呼び込むための「空っぽ」を運用する感性が息づいているのだ。「シンプル」（簡素な）というより「エンプティ」（空っぽな）。何もないところに想像力を呼び込んで満たす。意味でびっしり埋めるのではなく、意味のない余白を上手に活用する。日本のデザインには、そうした感性が脈々と根付いていると僕は思う。

（出典　「創造するということ」）

（注）
風来坊――どこからともなくやって来て、またどこへともなく去る人。
しつらい――飾り付け。用意。
軒――屋根の下端で、建物の壁面より外に突出している部分。
オペラハウス――演劇と音楽によって構成されるオペラの上演を目的とする劇場。
モダニズム――現代的で新しい感覚・流行を好む傾向。

①　――の部分ⓒ、ⓓを漢字に直して楷書で書きなさい。

②　ⓐ「も」と品詞が同じものは、ア～カのうちではどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。

ア　友達が困っていたので、
イ　優しく
ウ　声を
エ　かけた。
オ
カ

③　ⓑ「古来、日本人は神様のことをどう考えてきたか」とありますが、これに対する筆者の考えを説明した次の文の［X］、［Y］に入れるのに適当なことばを、それぞれ文章中から二字で抜き出して書きなさい。

古来、日本人は神様のことを、どこにでも存在し、自分たちに生きるための［X］をもたらす［Y］の力そのものだと考えてきた。

④ ⓔ「神社というのは昔からそういう風にできている」とありますが、これがどういうことかを説明したものとして最も適当なのは、**ア**～**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア いつでも自分たちを助けてくれる神様に対して畏敬の念を表すために、神社は神様が好む空っぽの空間として作られているということ。

イ 居場所の不確かな神様が存在する可能性が高いと人々に思わせるために、神社は鳥居や社を配置して装飾的に作られているということ。

ウ ありとあらゆるところにいる神様と誰でも交流できる場所にするために、神社は確実に神様がいる場所として作られているということ。

エ その場所に行けば神様に会えるかもしれないと人々に感じさせるために、神社は計画的に空っぽの空間として作られているということ。

⑤ ⓕ「春を表すのに桜のイメージを取り入れたい」とありますが、ここで述べられているヨーロッパと日本の違いについて具体的に説明した次の文の［　　］に入れるのに適当なことばを、三十字以内で書きなさい。

桜のイメージを用いて春を表現するとき、ヨーロッパのオペラハウスでは、演出家が客に疑似的に再現した桜の木を見せるという方法で直接的に春を感じさせるのに対し、日本の茶室では、主人が客に［　　］という方法で間接的に春を感じさせる。

⑥ この文章で述べられた「日本の文化とデザインの関係」について説明したものとして最も適当なのは、**ア**～**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 日本の文化には「空っぽ」を活用しようとする感性が見られ、欠けたところのある作品でも、見る人に不足を補ってもらおうとする作り手の姿勢にも影響を与えている。

イ 日本の文化には「空っぽ」をうまく生かそうとする感性が見られ、新たなものを創り出し、それを見る人の感性を働かせようとする作り手の意図にも影響を与えている。

ウ 日本の文化には「空っぽ」を好ましく思う感性が見られ、何もない空間が偶然できてしまっても、見る人にはそれがよいと思わせる作り手の技術にも影響を与えている。

エ 日本の文化には「空っぽ」を大切にしようとする感性が見られ、自然を題材にした芸術作品によって、見る人を満足させようとする作り手の狙いにも影響を与えている。

4

中学生の桃子さんは、健太さん、絵理さんと一緒に【資料Ⅰ】【資料Ⅱ】を見ながら、情報を得る手段として各メディアがもつ強みと弱みについて話し合った後、新聞の強みについて【資料Ⅲ】のようなメモを書きました。次の【話し合い】を読んで、①～③に答えなさい。

【話し合い】

桃子　まずは【資料Ⅰ】を手掛かりにして、それぞれのメディアの特徴を考えてみようか。

健太　僕は普段よく使っているから、インターネットの結果が気になるな。［　　］という結果には、手軽に情報を得られる一方で信頼できない情報が多いというインターネットの特徴が関係している気がするよ。

絵理　その考え方は正しいかもしれないね。でも、弱みはあるけれど、利便性が高いからこそ、どの年代でもインターネットを重要な情報源だと考える人が多いのだと思うよ。

桃子　テレビはどう？　重要度も信頼度も高い傾向にあるね。

健太　信頼度が高いから、信頼できる情報を得られることがテレビの強みと言えそうだね。重要度が高いのは、音声と映像で情報を伝えてくれるので、受け身でいられて楽だからかな。

絵理　確かにね。だけど、録画しない限り視聴する時間や順番を自分で決められない点は弱みかもしれないよ。

健太　新聞はどうかな。10代、20代では重要度も低いし、【資料Ⅱ】からわかる平日の行為者率も5％と低いよ。

桃子　でも、行為者率が低いわりに、重要度や信頼度はとても高いと言えるんじゃない？

絵理　必要なときだけ読むという人や、まったく読まないけれど信頼できると思っている人が多いのかもね。

健太　新聞の強みを理解するには、【資料Ⅰ】【資料Ⅱ】からわかること以外にも目を向ける必要がありそうだね。

絵理　新聞が本や雑誌と同じ活字メディアだということに注目したらどうかな。映像メディアのテレビや、複合メディアのインターネットにはない強みが見つかりそうだよ。

桃子　他のメディアとの違いを考えることで、新しい気づきを得られるかもしれないね。私は新聞の強みについてもっと深く考えてみようかな。

【資料Ⅰ】各メディアの情報源としての重要度、信頼度

	テレビ		新聞		インターネット	
	重要度	信頼度	重要度	信頼度	重要度	信頼度
10代、20代	80%	59%	30%	58%	87%	34%
30代、40代	87%	60%	47%	66%	83%	29%
50代、60代	91%	65%	73%	71%	65%	28%

「重要度」は「情報を得るための手段（情報源）としてどの程度重要か」という質問に肯定的な回答をした人の割合、「信頼度」は「信頼できる情報がどの程度あると思うか」という質問に肯定的な回答をした人の割合を示している。

①　健太さんの発言の内容が論理的なものとなるために、［　　］に入れるのに最も適当なのは、**ア**～**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　10代、20代では三つの年代の区分の中で重要度が最も低い

イ　10代、20代では三つの年代の区分の中で信頼度が最も高い

ウ　10代、20代では他の二つのメディアよりも重要度が高い

エ　10代、20代では他の二つのメディアよりも信頼度が低い

② 【話し合い】の特徴を説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　桃子さんは自分の気づきや考えについては何も言わず、話し合いを進行させることに専念している。

イ　健太さんは資料から読み取れることを元に発言しており、三人の合意を形成する役割を果たしている。

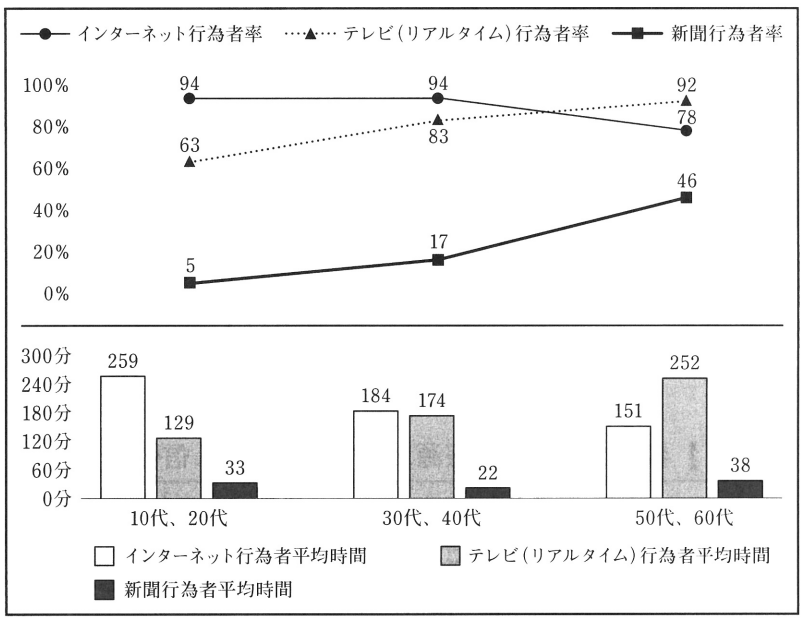
ウ　絵理さんは相手の発言を受けて自分の意見を述べており、話し合いの内容を深める役割をしている。

エ　三人ともお互いの意見に対して否定的なことを言わず、資料の数値を具体的に根拠として示している。

③ 【資料Ⅲ】の［　　］に入れるのに適当な内容を、**条件**に従って八十字以上百字以内で書きなさい。

条件
1　一文目に、情報を得る手段として新聞がもつ強みを書くこと。
2　二文目に、一文目で述べた強みの根拠を、活字メディアとしての新聞の特徴を踏まえて書くこと。

【資料Ⅱ】各メディアの行為者率・行為者平均時間（平日）



「行為者率」はそのメディアを利用する人の割合、「行為者平均時間」は行為者の１日あたりの平均利用時間を示している。

（【資料Ⅰ】【資料Ⅱ】は総務省「令和２年度　情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」から作成）

【資料Ⅲ】桃子さんのメモ

《インターネットと比べたときの強み》
より信頼できる情報を得ることができる。なぜなら、個人で自由に情報を発信できるインターネットとは違い、新聞の記事は専門性をもった記者が取材をもとに書いており、編集者も目を通しているので、より正確な情報が書かれているからだ。

《テレビと比べたときの強み》